

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 1 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370087

研究課題名(和文) 19世紀末におけるソシュールの政治思想についての文献学的研究

研究課題名(英文) Philological studies on the political thought of Saussure at the end of the 19th century

研究代表者

金澤 忠信 (Kanazawa, Tadanobu)

香川大学・経済学部・准教授

研究者番号：20507925

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：ジュネーヴおよびパリでの調査で、ソシュールの書簡、19世紀末のアルメニア人虐殺事件、ドレフュス事件の際の知識人やジャーナリストに関する稀少な資料を入手することができた。2014年3月のジュネーヴ滞在中、コロンビア・アンティオキア大学のクラウディア・メヒア・キチャーノ教授の知己を得て、彼女自身がソシュール家で発見した新資料を提供された。そこにはG・クレマンソー宛ての手紙の草稿や、日本の雑誌『國民之友』に関する手稿などが含まれている。この新資料と従来の資料を総合的に読解することを通じて、ソシュールの政治的立場を明らかにし、当時の知識人の相関関係の中にソシュールを位置づけることが可能になった。

研究成果の概要(英文)：In the Library of Geneva, in the Armenian Center of Geneva or in the National Library of France, I collected such research materials as the correspondence of Saussure, rare documents on the Armenian Genocide at the end of the 19th century and the relief works for persecuted Armenians, political remarks of Intellectuals on the Dreyfus Affair. During my stay in Geneva on March 2014, I met Claudia Mejia Quijiano, professor of the University of Antioquia. She offered me new documents of Ferdinand de Saussure that she had discovered in the residence of the Saussure family. There are contained a draft of his letter to Georges Clemenceau, a manuscript mentioning "Kokumin-no-tomo" (a Japanese monthly general magazine published in Tokyo from 1887 to 1898), etc. Reading the new documents of Saussure and comparing them with political and journalistic discourses of those days have enabled to locate his position in the correlation among the Intellectuals and journalists.

研究分野：言語思想史

キーワード：ソシュール 政治思想 言語思想 19世紀末・20世紀初頭 ジュネーヴ アルメニア人虐殺 ドレフュス事件 ポーア戦争

1. 研究開始当初の背景

ソシュール没後 100 年

スイス・ジュネーヴ出身の言語学者フェルディナン・ド・ソシュール (Ferdinand de Saussure, 1857-1913) が亡くなって、2013 年で 100 年になる。また 2016 年には、ソシュールの名を広く世に知らしめた『一般言語学講義』(*Cours de linguistique générale*, 1916) の出版から 100 年となる。そのため、今後数年間は世界的にソシュールの読み直しが行われることになる。実際、ソシュール没後 100 年を記念して、第 19 回国際言語学者会議が 2013 年 7 月にジュネーヴで開催される。また金澤も、2012 年 10 月 21 日、日本フランス語フランス文学会秋季大会 (神戸大学) において、「ソシュール没後 100 年」と題したワークショップに、コーディネーターとして参加した。

新資料の発見

1996 年にジュネーヴのソシュール家で新たに発見された資料のなかには、言語学関係の手稿のほか、ドレフュス事件、日清戦争、ボア戦争、アルメニア人虐殺事件など、19 世紀末の歴史的事件に関する草稿が含まれていた。金澤は博士論文 (「ソシュールと言語学」、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻、2008 年) でこれらの手稿を紹介・翻訳し、詳細に分析した。このようにソシュールの政治的言説をまとめたかたちで論じたのは、日本ではもちろんのこと、世界でも初めてである。これによって、人道主義的な親ドレフュス派や、キリスト教徒としてアルメニア人救済活動に従事する人々を痛烈に批判し、政治権力・軍事を重視するソシュールの、冷徹な現実主義者としての側面が明らかになった。本研究は、この博士論文を土台にして、ソシュールにおける言語思想と政治思想の関連性を究明するものである。

ソシュールの言及しているアルメニア人虐殺は、1894 年から 1896 年にかけて行われたものであるが、彼の死後、1915-1916 年にも大規模な虐殺が行われている。いずれにしても、現トルコ政府は公認も謝罪もしておらず、このことはトルコとアルメニアの国交正常化およびトルコのヨーロッパ連合加盟に多大な影響を及ぼしている。また、2011 年 12 月にフランス国民議会 (下院) でアルメニア人虐殺の否定を禁じる法案が可決され、トルコ側はこれに猛反発している。このように、一世紀前のアルメニア人虐殺事件はなおアクチュアルな問題であり、現代でも論及するに値すると言える。

2. 研究の目的

本研究は、19 世紀末から 20 世紀初頭にか

けて起こった、ドレフュス事件、日清戦争、ボア戦争、アルメニア人虐殺事件など、一連の世界史的イベントにたいするヨーロッパの「知識人」たちの立場・態度をあらためて検証したうえで、人道主義を批判する内容の手稿を遺したスイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュールの政治的立場を明らかにするというものである。さらに、ソシュールにおいて、歴史比較言語学研究、一般言語学研究、伝説・神話研究、アナグラム研究、政治的言説の執筆が同時期に行われていたことを証明し、原理や情緒に拠って立つことを許さないその冷徹な政治思想が、言語思想と論理の型の点で共通していることを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は「19 世紀末におけるソシュールの政治思想についての文献学的研究」であり、基本的には、出版された書物および未公開の手稿などの文献資料を収集し、詳細な分析・読解を行った。

日本での調査

日本で入手できる図書により、19 世紀末の歴史的事件について詳細に調査した。たとえばアルメニア人虐殺に関しては、藤野幸雄『悲劇のアルメニア』(1991)、Vahakn N. Dadrian: *The History of the Armenian Genocide* (1995)、中島偉晴『アルメニア人ジェノサイド』(2007)、フンチャク革命党をはじめとするアルメニア人政党に関しては主に Louise Nalbandian: *The Armenian Revolutionary Movement* (1967) を参照した。ボア戦争に関しては Leonard Thompson: *A history of South Africa* (1990)、岡倉登志『ボア戦争』(2003) を、ドレフュス事件および知識人の活動に関しては Michel Winock: *Le siècle des intellectuels* (1997-1999)、Ursula Bähler: *Gaston Paris dreyfusard* (1999) などを参照した。特に当時のフランスの「知識人」それぞれの立場と相関関係について再確認した。

ジュネーヴでの調査

2014 年 3 月に 3 週間、2016 年 3 月に約 1 週間ジュネーヴで調査を行い、日本あるいはインターネット上では入手困難な資料を収集した。

ジュネーヴ図書館 (Bibliothèque de Genève) では、手稿管理課にて、フェルディナン・ド・ソシュールの手稿・書簡・蔵書目録・講義記録・各種明細書等の資料のうち、本研究に関係のあるものをコピーあるいはマイクロフィルム化した (Archives de Saussure 366-368 他)、許可が出たものに関してはデジタルカメラで撮影した。

ジュネーヴ図書館では、やはり研究で来て

いたソシュール研究者でコロンビア・アンテ
イオキア大学教授のクラウディア・メヒア・
キチャーノ (Claudia Mejía Quijano) 氏と
知り合い、意見交換をし、今後の研究協力を
約束することができた。さらに、キチャーノ
教授がこのほどジュネーヴのソシュール家
で新たに発見したフェルディナン・ド・ソシ
ュールの手稿のコピーを研究資料として提
供していただいた。

ジュネーヴ・アルメニア・センター (Centre
Arménien de Genève) では、付属図書室に
て、19世紀末から20世紀初頭のジュネーヴ
におけるアルメニア人の政治活動、同市への
アルメニア人の入植状況、スイスにおけるア
ルメニア人救済活動等に関する資料 (著作・
手稿・書簡・パンフレット・機関紙等) を調
査し、許可を得てデジタルカメラで写真撮影
した。とりわけ、スイスにおけるアルメニア
人救済活動を先導し、ソシュールとは姻戚関
係にあったレオポルト・ファーヴル (Léopold
Favre) その弟でソシュールの竹馬の友だっ
たエドゥアール・ファーヴル (Édouard
Favre) 国際親アルメニア同盟書記アントニ
ー・クラフト = ボナール (Antony
Krafft-Bonnard) に関する資料を収集した。

同センターが所蔵資料の網羅的な整理に
着手したのは十数年前であり、図書室に開架
されている図書はその一部にすぎず、未整
理・未配架の図書・資料のほうが多い。その
ため、同センター司書ネヴリク・アザディ
アン (Nevrik Azadian) 氏に資料の選定・紹介
をしていただいた。

元ジュネーヴ大学教授アレックス・ロイカ
ルト (Alex Leukart) 氏は印欧語歴史比較言
語学の専門家であり、パリでエミール・バン
ヴェニスト (Émile Benveniste) に師事した
ことがある。アルメニア語にも造詣が深い。
アルメニアの言語、文化、歴史、あるいはア
ントワヌ・メイエ (Antoine Meillet) らア
ルメニア研究者について知見を得るために
ロイカルト氏と意見交換をした。

パリでの調査

2014年8月から9月初頭にかけての約1
ヶ月間、パリにあるフランス国立図書館
(Bibliothèque National de France) で調査
を行った。

ソシュールは1880年から1891年までパリ
に滞在しているが、従来のソシュール研究に
おいて、研究・教育以外の活動についてはほ
とんど調査されてこなかった。この伝記的事
実の空白部分を埋めるべく、特にソシュール
に縁があり、ドレフュス事件やアルメニア問
題に関与したガストン・パリシ (Gaston
Paris) ミシェル・ブレアル (Michel Bréal)、
ルイ・アヴェ (Louis Havet) ポール・メイ
エール (Paul Meyer) ジャン・プシカリ
(Jean Psichari) ら「知識人」や、高等研究
実習院 (École pratique des Hautes Études)
以外で知り合った可能性のある人物とソシ

ュールとの交流関係について調査した。調査
の手掛かりは当時パリで発行されていた新
聞にあるので、ソシュールが書簡を交わした
と推測されるジャーナリスト、たとえば『タ
ン』紙 (*Le Temps*) 編集長アドリアン・エブ
ラル (Adrien Hébrard) 同論説員フラン
シス・ド・プレサンセ (Francis de Pressensé)、
『フィガロ』紙 (*Le Figaro*) 論説員ドゥニ・
ギベール (Denis Guibert) などに関する資
料を収集した。

高等研究実習院でのソシュールの講義に
は、アルメニア人救済活動に積極的に従事す
ることになるピエール・キヤール (Pierre
Quillard) が出席していた。彼とアルメニア
人詩人アルシャグ・チョバニアン (Archag
Tchobanian) の著作およびソシュールがそれ
を読んでいた可能性についても調査した。

4. 研究成果

従来のソシュール研究では、ソシュールの
死後、実質的に弟子が執筆した『一般言語学
講義』と、ソシュール自身の手稿との齟齬を
指摘し、その言語理論を再構築することに多
くの努力が費やされた。他方、ソシュールの
政治的言説に関する研究は、まだ本格的には
着手されていない。本研究は、スイスの言語
学者として知られるソシュールが、19世紀末
の世界史的イベントに際して、どのような政治
的立場を取り、当時のヨーロッパ各国の外交
官・政治家やプレサンセをはじめとするジャー
ナリストをどのように批判し、また「知識
人」らとどのような関係にあったのかについ
て、複合的な視点から考察することができた。

本研究は金澤の博士論文「ソシュールと言
語学」の一部で展開した議論を基礎にしてい
るが、今回のジュネーヴおよびパリでの調査
のおかげで、個々の情報を再確認・再検証す
ることができ、また新たに補足情報を追加す
ることができた。とりわけ、アルメニア人虐
殺事件の報道に携わったジャーナリストや
救済活動に従事したスイス人およびフラン
ス人に関する情報を多く得ることができた。
それにより、ソシュールの政治的立場、その
情報源、政治思想の形成過程を明らかにす
ることができた。ただし、特に手紙の草稿は断
片的で中断されていることがあり、また名宛
人が記されていないことも多く、具体的な話
題や個人的な人間関係を特定できないケー
スもあった。それを明らかにしていくのが今
後の課題である。

ジュネーヴ滞在中にソシュール研究者の
キチャーノ教授の知己を得て、研究協力関係
を築くことができたのは大きな収穫だった。
キチャーノ教授は、ソシュールが最晩年を過
ごしたヴェフフラン城 (Château de Vufflens)
で、2013年7月から2015年3月にかけて調
査を行い、新たな資料を発見している。この
新資料のうち、政治的な事柄に言及している

ソシュールの手稿のコピー（紙媒体）およびデジタルカメラで撮影した写真（PDF）を提供していただいた。これらの資料は教授の論文中で紹介されているが（Claudia Mejía Quijano: «L'œuvre en réseaux — nouvelle découverte de manuscrits saussuriens», *Beiträge zur Geschichte der Sprachwissenschaft*, Vol. 25, N° 1, Nodus Publikationen, 2015, pp. 149-176）そのテキストはまだ公開されていない。今回、発見者であるキヒャーノ教授と所有者であるフィリップ・ド・ソシュール（Philippe de Saussure）氏に特別に許可を得て、邦訳・引用するかたちで取りあげることができた。

キヒャーノ教授が発見した新資料には、冒頭部分に「Kokumin-no-Tomo」と記された手稿がある。これは徳富蘇峰の設立した民友社が1887年から1898年まで発行していた総合雑誌『国民之友』のことである。当時『国民之友』は欧米の新聞各紙でたびたび紹介されており、ヨーロッパでもある程度知られていた。言及されている内容（大英帝国の凋落）および用いられている語句・表現から判断して、ソシュールは、1904年12月17日付けの『プログレ』紙（*Le Progrès*）に掲載された記事を参照していると考えられる。そこでは『国民之友』第246号（1895年2月3日発行）の一節が仏訳され紹介されている。これにより、ソシュールは、当該の手稿も含め、いくつかの手稿で展開している一連のイギリス批判に関して、新聞記事を情報源とし、さらに日本の雑誌を参照していたことがあらためて確認された。

また、キヒャーノ教授の新資料には、当時ジャーナリストで、のちに仏大統領になるジョルジュ・クレマンソー（Georges Clemenceau）に宛てた手紙の草稿も含まれている。1899年1月28日に書かれたと推測されるこの草稿は、ドレフュス事件がテーマになっている。このなかでソシュールは、前日の1月27日付け『オロール』紙（*L'Aurore*）の記事のなかでクレマンソーが示唆している、アルマン・デュ・パティ・ド・克蘭（Armand du Paty de Clam）とフェルディナン・ウォルサン・エステラジー（Ferdinand Walsin Esterhazy）の「親密な関係」について疑問を投げかけ、それとは異なる情報を掲載している別の新聞記事を読むよう促している。しかもソシュールは同内容の手紙を少なくとも4通クレマンソーに書き送っているが、一度も返事をもらっていない。

1894年11月1日、アルフレッド・ドレフュス（Alfred Dreyfus）の逮捕がフランスの新聞各紙で報じられた直後、ソシュールは反ユダヤ主義を標榜する『リーブル・パロール』紙（*La Libre Parole*）の編集長エドゥアール・ドリュモン（Édouard Drumont）に宛てて手紙を書いた形跡がある。当初、ドレフュス事件の真相を知る者はいないとはいえ、ソシュールはドリュモンの主張に完全に同

調し、ユダヤ人批判を展開している。その後、ソシュールはパリで発行されていた新聞各紙を日々読み比べながら、事件の推移をつぶさに追っていた。おそらくクレマンソー宛ての手紙の草稿と同時期に、ソシュールは「私はれっきとしたドレフュス主義者である」と手稿のなかで述べている。ドリュモン宛ての手紙の草稿の内容に鑑みれば、ソシュールは、他の何人かの「知識人」と同様、「転向したドレフュス派」であった。しかしソシュールの批判の矛先は、反ドレフュス派の論客ではなく、むしろドレフュス派に向けられる。この点がソシュールの独自の視点・方法と言える。ソシュールの議論は、情緒、正義、人道主義など、道徳的価値を徹底的に排除したところから出発している。ソシュールは「真実を愛する者」として「ドレフュスの勝訴を望む」。「真実」は、エミール・ゾラ（Émile Zola）の言う「真実」と「正義」から援用していると思われるが、ソシュールには「真実」があって「正義」がない。それゆえソシュールは、「真実」と「正義」というスローガンのうち、「真実」だけを掲げるドレフュス主義者であると言うことができる。

クレマンソー宛ての手紙の草稿は、たとえドレフュス派のジャーナリストあるいはドレフュス本人にとって不利に、容疑者として浮上してきたエステラジーにとっては有利にはたらくことになったとしても、ひたすら「真実」を求める一環で書かれている。この新資料によって、ソシュールの政治的立場があらためて浮き彫りになった。

ソシュールは日清戦争、ボア戦争、アルメニア人虐殺、ドレフュス事件に際して、「知識人」として署名活動など直接政治的行動に出たわけではなく、メディア・ジャーナリズムに訴えて世論にはらきかけたわけでもないが、ジャーナリスト、特に新聞の編集者・論説員に手紙を書き送ることを通じて、世界的な事件に積極的に関与し、自らの政治的立場を表明しようとしたと言える。ソシュールは「書簡恐怖症（épistolophobie）」を自認していたが、少なくとも政治的な事柄に関してはあてはまらないことが、本研究によって明らかとなった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

金澤 忠信、単著、「キヤールとアルメニア」、『香川大学経済論叢』第 87 巻 1-2 号、査読無、2014 年 9 月、43-56 頁。

〔学会発表〕（計 1 件）

金澤 忠信、単独、「ソシュールの政治的言説（2）」、日本フランス語フランス文学会中国・四国支部大会、岡山大学、岡山県岡山市、

2015年11月21日。

〔図書〕(計 1 件)

金澤 忠信、単著、『ソーシャルの政治的言説』、月曜社、2016年度内に出版予定、約200頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

金澤 忠信 (KANAZAWA, Tadanobu)

香川大学・経済学部・准教授

研究者番号：20507925

(2)研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3)連携研究者

なし ()

研究者番号：